

ずっと見てるよ。

K

私の実家は、田舎の中でもずっと山奥の奥のある一軒家だ。買い物しに行くのも一時間はかかる。だから畑や田んぼを使ってなるべく買い物に行くのを減らす事をしている。だけど小学校に行くのも五十分はかかるので、車で学校に通っている。お母さんとお父さんは、会社に早く行って遅く帰っている。なので私が学校から帰るときは、毎日近くのバス停までバスで帰っている。

家に帰ったら、冷めたご飯が置いてあつてそれを温めなおして食べている。もちろん家には私一人だけ。おばあちゃんとおじいちゃんは、私が生まれて四歳のときに他界した。だから一人で温めなおしたご飯を食べる。お母さんやお父さんが帰ってくるのは十二時ごろだから、朝しか母さんたちと会うことはない。

一人で寝る準備をしていると二階から「ドスドン ドンバン」という音がした。なんだろう物が落ちたのかなと思っただけ、すべてものは押入れにしまつて

いるので、落ちることはほばないはず。おかしいなと思つた私は、二階に行つた。もうさっきの音はしない。音がした部屋に行くと、見たことのない女の子の古い人形があつた。私は、その人形を見てこう思つた。人形には魂が宿するというけど本当なの？ 私はその人形を手に取り、一階へ持つて降りた。するとその人形の服の中から古い紙が落ちてきた。その紙の中を見てみると、おばあちゃんの名前となにかの文章が書かれている。私は、その中を見て分かつた。おばあちゃんが大切にしていた人形だと。もう十時になつていたので寝た。

朝になつた。人形は机の上にあるまんま。今日は土曜日だけど、お母さんたちは仕事で、いない。学校で出た宿題を済ませる。静かな部屋で私一人だけ。すぐく暇な時間を過ごしていた。お母さんたちにあまり会えていないので少し寂しくなつてきた。すると、「ずっと見てるよ。大丈・夫あんし・。」「何？」と大きな声で叫んだ。

人形には、優しかったおばあちゃんの魂が宿つていた。